

なぜぼくたちを切るんだ。ぼくたちはずっとむかしからここにいたのに。

(真鍋小六年 福田恵子)

ちよつとそのだまってボクを見ている人、どうしてくれるんだよ。だまってみてないでなんとかしてよ。ぼんとに、もうノ

(上高津小六年 湯原京子)

おれはものだめだ。きみたちの力でなんとか緑を守ってくれ……ウ……ウ……ガクッ。(都和小六年岡田彰二) みどりの美しさがわからないの？

(荒川沖小五年 畔上幸子)

自然なんて人間がみんなこわしてしまふんだ。

(都和小六年 味田ルリ子)

ウーン、くやしい。大雨がふったらどうなるか覚えていろよノ

(上大津西小六年 高野悦子)

## 研究学園都市に住んで

石 沢 淳 子

建設途上のこの研究学園都市に移り住んで三月でちょうど二年になります。杉並の立正高校の生徒達が被害を受けたことからじまった、光化学スモッグ騒ぎの中を

東京脱出できることにむしろほっとし、少々不便でも、自然に恵まれた空気のきれいな環境で子供達を育てることができると幸せに思ってたやってきました。

はじめて学園都市を訪れた時、筑波山が見え出してからもかなり田舎道を走った頃、はるかに続く田畑、林のむこうにぼつんとひとにぎりのアパート群が建っておりこんな田舎でも少しづつ開けてきて、住んでいる仲間がいるのにちよつと安心し、ところで学園都市は？と思いましたが、それが私達の住むことになる住宅ということでしたら、それが私達の住むことになる住宅ということ、急に心細くなったのが印象に残っております。

覚悟はできていたはずなのに、都会ではごくあたり前のこととして利用していたごみ収集、お店、医者、交番交通機関など、ないないづくしにはじめのうちほとまどうことは筑波山が見え、自然に恵まれているのがせめてもの救いでした。もつともまもなく痴漢が出るので危険ということで散歩もできなくなりました。それがいつの頃からか木が倒され、ブルドーザーが入って造成が進み私達住民の全く知らないうちに緑がどんどん失なわれていくのに不安になり、グループで学園都市建設計画を調べはじめました。その結果、狭い面積の学園都市に一定数の機関をおさめなければならぬことから、自然の樹